

共感共苦の感覚を取り戻す

— 朽木祥さんの作品世界によせて —

カズノコト

緑色の珠に月の光を映そうとしている小さな児童の八寸、ちよっとなさない顔をしたラブラドール犬のチェスタトン、プールサイドに座っている神秘的な児童の不知……。そして地蔵石のうしろにいる小さなきつねや、庭のユリノキの洞に住んでいる「花明かり」の小さい人たち……。不思議な小さい存在は、朽木さんの作品を思い出す時にいつも鮮やかに浮かんでくる映像です。それはとても親しみやすく、たそがれ時に私たちが垣間見る幻影のようでもあります。

このように愛らしい、ファンタジックな存在に心を寄せることができる作者は、もう一つの重たいテーマを抱えています。でもそれはまったく異なる世界ではない、というのが、この私の小文の趣旨なのです。

昨年十月、親子読書地域文庫全国連絡会の集会で講演された朽木さんのお話の中で、「共感共苦」という言葉を使われたのが私にとって印象的でした。この言葉は英語でい

えば中世ラテン語に起源を持つコンパッション（哀れみと訳されますが、もとはキリストの受難の苦しみを共にするという感情もこめられていました）にあたると思われます。共感共苦は、他者へ向けて呼びかけるすべての運動の原点であるとともに、作家が人間を描く原点であるでしょう。お話の中でも、「失われた声」を聞くこと、名前もわからなくなった人を探しに死者の国へ降りていくことが物語である、と朽木さんは言われました。

最新作の『光のうっしえ』（講談社 二〇一三）では、競争体験、原爆体験のない若い世代―現代の中学生たちが、この共感共苦の実践者となります。

広島の灯籠流しの夜、十二歳の希未のぞみは祖母ほどの年齢の知らない婦人に、「あなたはおいっつ？」と訊ねられます。老婦人の持っていた古い写真の少女に希未が似ていた、ということが、後になって不思議な邂逅を生むのですが、希未の母の言葉のように、「誰かを探している人が今でもたくさんいる広島、そうした人びとが、大切な人の死を信じ